

平年収量が増減する都道府県の生産事情 (詳細版)

大臣官房統計部

平成 3 1 年 3 月 1 4 日

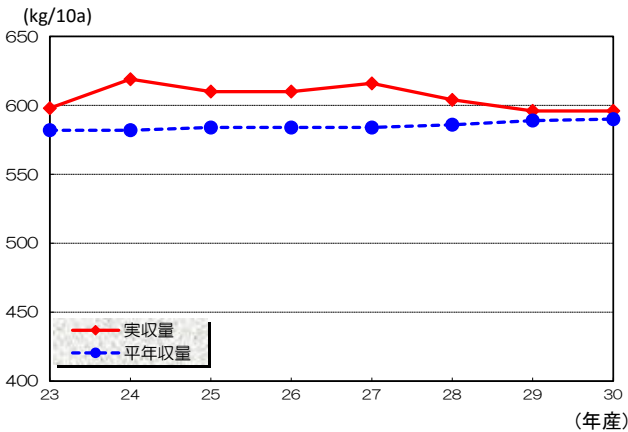
農林水産省

青 森

1 近年の10 a 当たり収量等の水準

青森県における近年の10 a 当たり収量については、平年収量を上回って推移している。
(図 1 及び表 1)

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量的水準



青 森	23	24	25	26	27	28	29	30
実収量	598	619	610	610	616	604	596	596
平年収量	582	582	584	584	584	586	589	590
前年差	2	0	2	0	0	2	3	1

資料：「作物統計」

表 1 平年収量と 7 中 5 平均対差等

	30 年 産 平年収量 ①	7 中 5 平 均 ②	平年収量 と の 差 ③=②-①	(参 考)	
				5 中 3 平 均	5 か 年 平 均
青 森	590	607	17	603	604

単位：kg

2 近年の生産事情等

(1) 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、「つがるロマン」から、収量水準の高い「まっしぐら」が増加傾向にあり、この 2 品種で約 9 割を占めている。

(図 2 及び表 2)

(2) 栽培技術等の動向

良食味・高品質米の安定生産（気象に左右されない米づくり）に向け、適正な肥培管理（つがるロマンは多肥料栽培に弱いことから追肥は窒素成分で 2kg 以内にする等）や水管理、適期移植、土作りの推進等が指導されるなど、安定栽培技術の普及・定着が図られている。

なお、育苗箱全量施肥では、施肥後 30 日程度の肥効抑制期間で分げつが抑制され、慣行栽培に比べ穂数の減少傾向が強いことから、穂数確保のため即効性肥料も併せて施用する農家が多くある。

図 2 品種別作付面積割合の動向

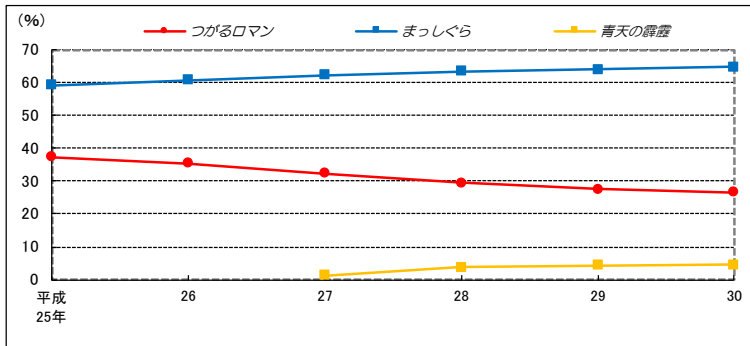


表 2 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a 当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H26	27	28	29	30
つがるロマン	600	35.5	32.4	29.5	27.6	26.6
まっしぐら	615	60.8	62.3	63.4	64.1	64.9
青天の霹靂	532	-	1.3	3.7	4.4	4.6

資料：水稲作況調査結果等

注：1 10a 当たり収量水準は原則として、最近 7 年のうち、最高及び最低を除いた 5 年平均である。

2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

表3 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表3）

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合（％）				
		H26	27	28	29	30
青森	593	10.9	11.0	11.2	11.3	11.5
津軽	631	59.6	61.8	62.2	61.8	61.5
南部・下北	566	29.5	27.2	26.6	26.9	27.0

資料：水稲作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(3) 近年の作柄

近年は全もみ数が多い状況となっている。

収量構成要素については、平成21～25年と26～30年の各5中3平均で比較すると千もみ当たり収量は減少したものの、1㎡当たり全もみ数が3.6ポイント増加したため、10a当たり玄米重は0.8ポイント増加している。（表4、表5、図3及び図4）

表4 最近の作柄（平成24年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作況最終指数）
24	—	◎	106
25	○	—	104
26	◎	×	104
27	—	○	105
28	—	○	104
29	◎	×	101
30	○	×	101

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）

なお、平成27年産以降の作況指数は農家等が使用しているふり目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふり目幅（青森は1.85mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

図3 1㎡当たり全もみ数の推移

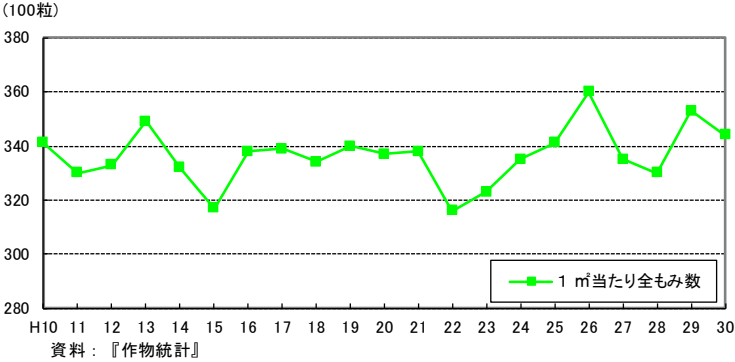


図4 千もみ当たり収量の推移

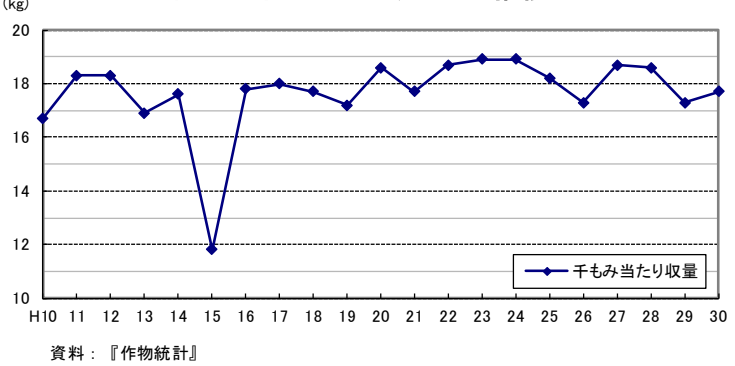


表5 収量構成要素

	21～25年 5中3 ①	平成 26年	27	28	29	30	対前年差	26～30年 5中3 ②	③＝ ②／①	ポイント 差
1㎡当たり株数（株）	20.7	19.8	19.6	19.5	19.5	19.4	△ 0.1	19.5	94.2	△ 5.8
1㎡当たり有効穂数（本）	408	446	452	427	421	405	△ 16.0	431	105.6	5.6
1穂当たりもみ数（粒）	80.9	80.7	74.1	77.3	83.8	84.9	1.1	80.6	99.6	△ 0.4
1㎡当たり全もみ数（百粒）	332	360	335	330	353	344	△ 9.0	344	103.6	3.6
千もみ当たり収量（g）	18.6	17.3	18.7	18.6	17.3	17.7	0.4	17.9	96.2	△ 3.8
玄米千粒重（g）	22.1	22.2	22.7	22.0	22.6	22.0	△ 0.6	22.3	100.9	0.9
10a当たり玄米重（kg）	611	622	627	615	610	609	△ 1.0	616	100.8	0.8

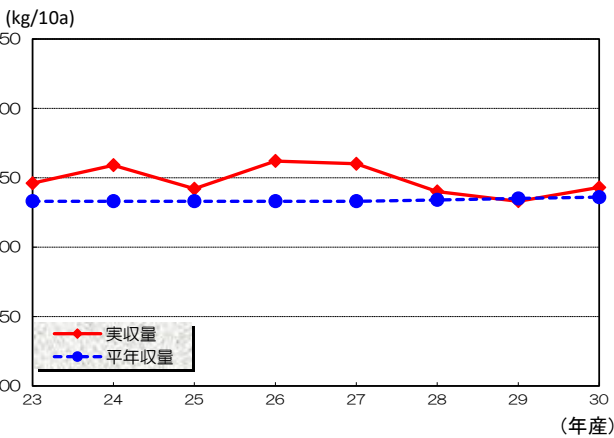
資料：「作物統計」

岩 手

1 近年の10 a 当たり収量等の水準

岩手県における近年の10 a 当たり収量については、おおむね平年収量を上回って推移している。（図1及び表1）

図1 近年の10 a 当たり収量と平年収量的水準



岩 手	23	24	25	26	27	28	29	30
実収量	546	559	542	562	560	540	533	543
平年収量	533	533	533	533	533	534	535	536
前年差	0	0	0	0	0	1	1	1

資料：『作物統計』

表1 平年収量と7中5平均対差等

	30 年 産 平年収量 ①	7 中 5 平 均 ②	平年収量 と の 差 ③=②-①	(参 考)	
				5 中 3 平 均	5 か 年 平 均
				548	548
岩 手	536	549	13		

2 近年の生産事情等

(1) 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、「ひとめぼれ」が7割を占め、「あきたこまち」が減少傾向にあるものの、岩手県のオリジナル品種である収量水準の高い「銀河のしずく」の作付割合が増加している。（図2及び表2）

(2) 栽培技術等の動向

適正な施肥（土壌診断に基づく補給型施肥（収穫等によってほ場外に持ち出される分だけを補給）及び追肥時期・追肥量の適正な実施（ひとめぼれ幼穂形成期に窒素量2 kg/10 a 等））、病害虫発生予察情報に基づく効率的な防除等による生産コストの低減、水管理及び適期収穫が指導されるなど、安定生産と品質向上の取組みが図られている。

図2 品種別作付面積割合の動向

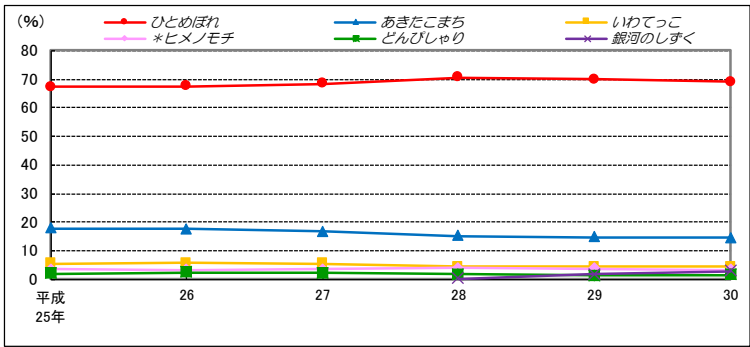


表2 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a 当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H26	27	28	29	30
ひとめぼれ	558	67.5	68.4	70.5	70.0	69.1
あきたこまち	562	17.5	16.7	15.1	14.7	14.4
いわてっこ	539	5.6	5.4	4.4	4.4	4.5
どんびしゃり	624	2.4	2.3	1.8	1.4	1.6
かけはし	531	0.7	0.6	0.5	0.4	0.4
*ヒメノモチ	562	3.3	3.6	3.9	3.8	3.4
銀河のしずく	570	-	-	0.3	1.7	2.8

資料：水稲作況調査結果等

注：1 10a 当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表3）

表3 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合（％）				
		H26	27	28	29	30
北上川上流	573	24.5	23.6	23.7	24.0	24.5
北上川下流	546	68.1	69.4	69.3	68.9	68.5
東部	490	2.7	2.7	2.7	2.7	2.5
北部	512	4.7	4.3	4.3	4.4	4.5

資料：水稲作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。

2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(3) 近年の作柄

近年、全もみ数が多い状況となっている。

収量構成要素については、平成21～25年と26～30年の各5中3平均で比較すると、1㎡当たり全もみ数が0.3ポイント増加している。（表4、表5、図3及び図4）

表4 最近の作柄（平成24年度以降）

年次	全もみ数	登熟	（作況最終指数）
24	—	○	105
25	○	—	102
26	◎	×	105
27	—	○	105
28	×	○	102
29	○	×	98
30	—	—	101

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）

なお、平成27年度以降の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（岩手は1.85mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

図3 1㎡当たり全もみ数の推移

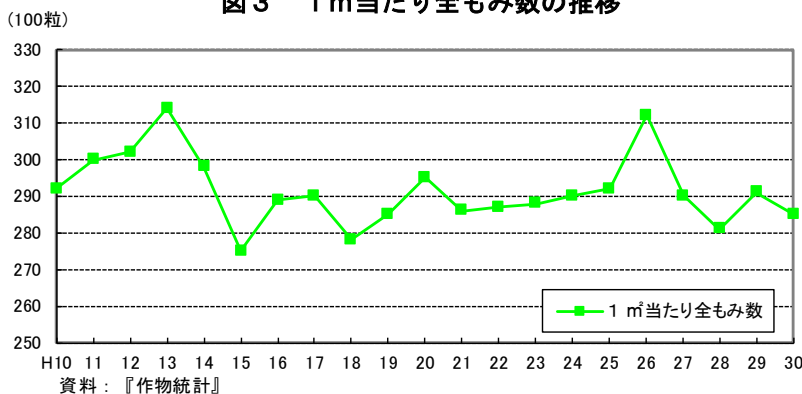


図4 千もみ当たり収量の推移

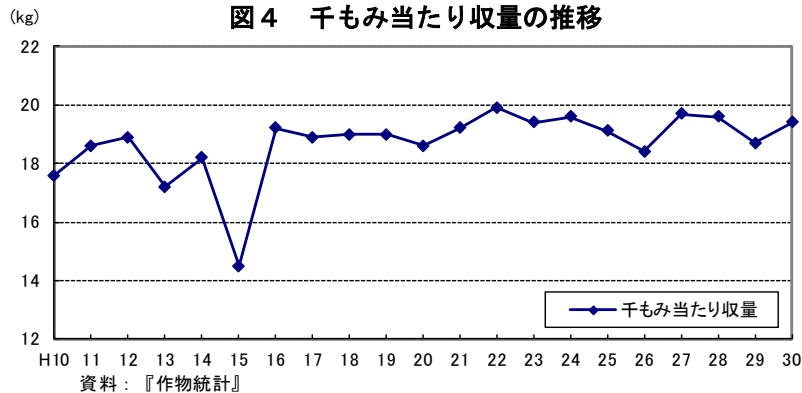


表5 収量構成要素

	21～25年 5中3 ①	平成 26年	27	28	29	30	対前年差	26～30年 5中3 ②	③= ②／①	ポイン ト差
1㎡当たり株数（株）	18.4	18.0	17.6	17.6	17.5	17.3	△ 0.2	17.6	95.7	△ 4.3
1㎡当たり有効穂数（本）	422	463	468	426	440	412	△ 28.0	443	105.0	5.0
1穂当たりもみ数（粒）	68.5	67.4	62.0	66.0	66.1	69.2	3.1	66.5	97.1	△ 2.9
1㎡当たり全もみ数（百粒）	288	312	290	281	291	285	△ 6.0	289	100.3	0.3
千もみ当たり収量（g）	19.4	18.4	19.7	19.6	18.7	19.4	0.7	19.2	99.0	△ 1.0
玄米千粒重（g）	21.8	21.7	22.4	21.8	21.9	21.9	0.0	21.9	100.5	0.5
10a当たり玄米重（kg）	562	573	572	550	543	552	9.0	558	99.3	△ 0.7

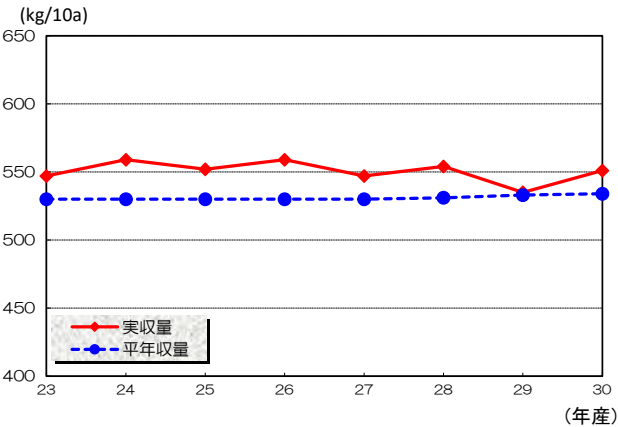
資料：「作物統計」

宮 城

1 近年の10 a 当たり収量等の水準

宮城県における近年の10 a 当たり収量については、平年収量を上回って推移している。
(図 1 及び表 1)

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量的水準



宮 城	23	24	25	26	27	28	29	30
実収量	547	559	552	559	547	554	535	551
平年収量	530	530	530	530	530	531	533	534
前年差	0	0	0	0	0	1	2	1

資料：『作物統計』

表 1 平年収量と 7 中 5 平均対差等

	30 年 産 平年収量 ①	7 中 5 平 均 ②	平年収量 と の 差 ③=②-①	(参 考)	
				5 中 3 平 均	5 か 年 平 均
宮 城	534	553	19	551	549

2 近年の生産事情等

(1) 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、「ひとめぼれ」が 7 割を占め、収量水準の高い「つや姫」及び「萌えみのり」が増加傾向にある。(図 2 及び表 2)

(2) 栽培技術等の動向

土壌分析に基づく適性施肥、大規模化に対応した熟期の異なる品種構成等による高良質・良食味米の安定生産技術が普及指導されている。また、高温による登熟不良等による品質・収量低下を軽減させるため、遅植えを推進している。

図 2 品種別作付面積割合の動向

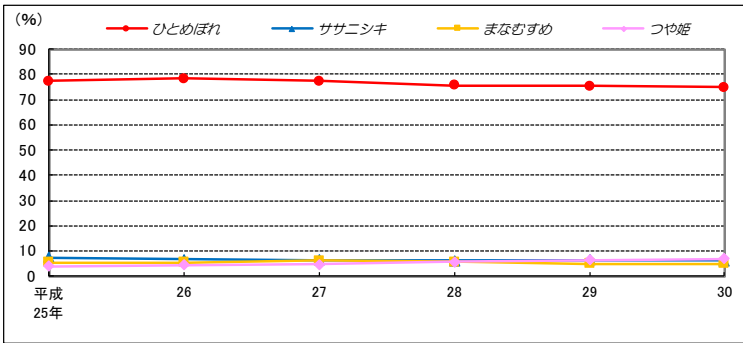


表 2 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a 当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H26	27	28	29	30
ひとめぼれ	560	78.3	77.4	75.7	75.5	74.9
ササニシキ	571	6.7	6.3	6.2	6.5	6.2
まなむすめ	585	5.3	6.2	5.6	4.8	4.8
コシヒカリ	504	1.3	1.3	1.2	0.9	1.0
つ や 姫	581	4.5	4.7	5.6	6.5	6.9
萌えみのり	600	0.5	0.5	0.5	0.6	1.2

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a 当たり収量水準は原則として、最近 7 か年のうち、最高及び最低を除いた 5 か年平均である。

2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

地域別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表3）

表3 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合（％）				
		H26	27	28	29	30
南部	532	10.5	10.6	10.5	10.3	10.2
中部	538	17.5	17.7	18.4	18.3	18.3
北部	560	60.2	60.0	59.1	59.3	59.5
東部	553	11.8	11.7	12.0	12.0	12.0

資料：水稲作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。

2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(3) 近年の作柄

近年、全もみ数が多い状況となっている。

収量構成要素については、平成21～25年と26～30年の各5中3平均で比較すると千もみ当たり収量は減少したものの、1㎡当たり全もみ数が3.1ポイント増加したため、10a当たり玄米重は0.5ポイント増加している。（表4、表5、図3及び図4）

表4 最近の作柄（平成24年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作最況終指）数
24	—	○	105
25	○	—	104
26	◎	×	105
27	○	×	103
28	○	—	105
29	○	×	99
30	○	—	101

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）

なお、平成27年産以降の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（宮城は1.85mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

図3 1㎡当たり全もみ数の推移

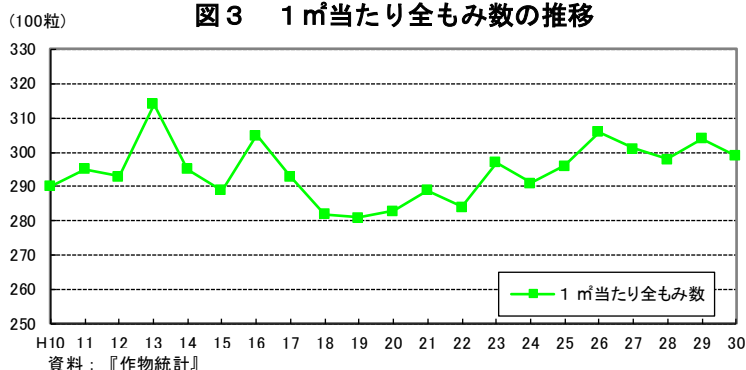


図4 千もみ当たり収量の推移

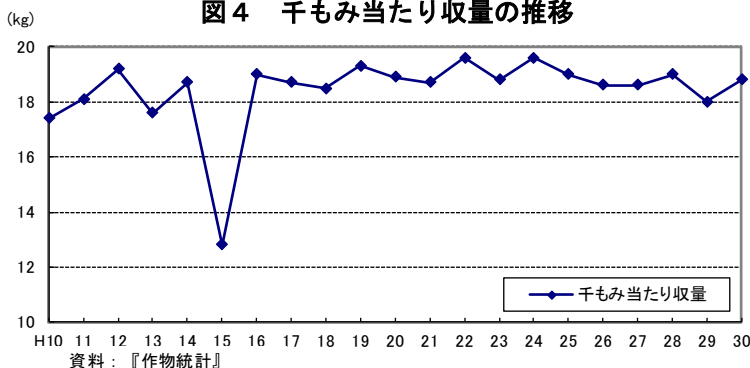


表5 収量構成要素

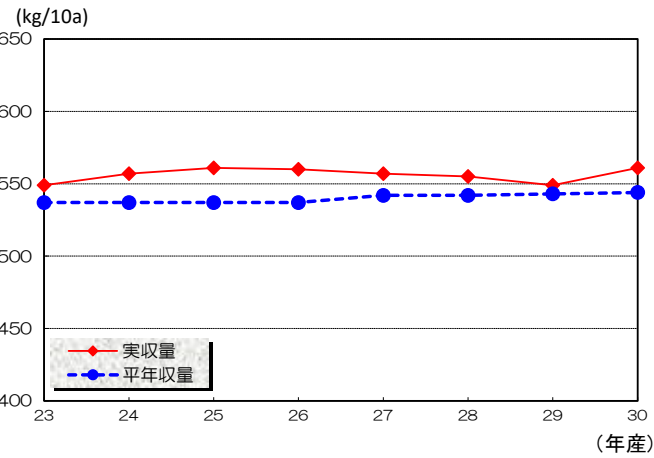
	21～25年 5中3 ①	平成 26年	27	28	29	30	対前年差	26～30年 5中3 ②	③= ②/①	ポイント差
1㎡当たり株数（株）	17.9	17.6	17.4	17.2	17.1	16.9	△ 0.2	17.2	96.1	△ 3.9
1㎡当たり有効穂数（本）	433	453	463	439	460	443	△ 17.0	452	104.4	4.4
1穂当たりもみ数（粒）	68.0	67.5	65.0	67.9	66.1	67.5	1.4	67.0	98.5	△ 1.5
1㎡当たり全もみ数（百粒）	292	306	301	298	304	299	△ 5.0	301	103.1	3.1
千もみ当たり収量（g）	19.1	18.6	18.6	19.0	18.0	18.8	0.8	18.7	97.9	△ 2.1
玄米千粒重（g）	21.7	21.4	21.8	21.5	21.8	21.6	△ 0.2	21.6	99.5	△ 0.5
10a当たり玄米重（kg）	559	570	559	566	546	562	16.0	562	100.5	0.5

資料：「作物統計」

1 近年の10 a 当たり収量等の水準

福島県における近年の10 a 当たり収量については、平年収量は上回って推移している。
(図 1 及び表 1)

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準



福 島	23	24	25	26	27	28	29	30
実収量	549	557	561	560	557	555	549	561
平年収量	537	537	537	537	542	542	543	544
前年差	0	0	0	0	5	0	1	1

資料：『作物統計』

表 1 平年収量と 7 中 5 平均対差等

	30 年 産 平年収量 ①	7 中 5 平 均 ②	平年収量 と の 差 ③=②-①	単位：kg (参 考)	
				5 中 3 平 均	5 か 年 平 均
福 島	544	558	14	557	556

2 近年の生産事情等

(1) 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、「コシヒカリ」及び「ひとめぼれ」で約 8 割を占め、収量水準の高い「天のつぶ」が増加傾向にある。(図 2 及び表 2)

(2) 栽培技術等の動向

土壌診断に基づくカリ施用、堆肥の施用による土づくり等の指導がされている。

図 2 品種別作付面積割合の動向

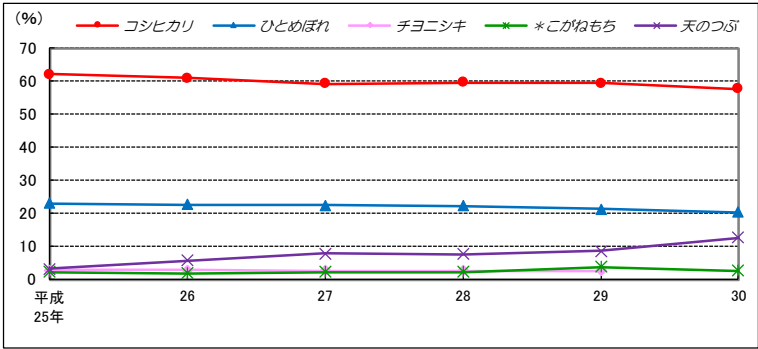


表 2 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a 当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H26	27	28	29	30
コシヒカリ	562	61.0	59.2	59.6	59.4	57.7
ひとめぼれ	588	22.7	22.5	22.2	21.4	20.4
天のつぶ	594	5.8	7.9	7.7	8.7	12.6
*こがねもち	527	1.9	2.2	2.2	3.8	2.6

資料：水稻作況調査結果等

- 注：1 10a 当たり収量水準は原則として、最近 7 か年のうち、最高及び最低を除いた 5 か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

作柄地帯別作付面積割合をみると、年によって異なるが、大きな変化はみられない。（表3）

表3 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H26	27	28	29	30
中通り	538	56.7	55.9	55.8	55.5	55.0
浜通り	518	9.9	10.1	9.4	9.9	10.6
会津	599	33.4	34.0	34.8	34.6	34.4

資料：水稲作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(3) 近年の作柄

近年、全もみ数が多い状況となっている。

収量構成要素については、平成21～25年と26～30年の各5中3平均で比較すると千もみ当たり収量は減少したものの、1㎡当たり全もみ数は4.8ポイント増加したため、10a当たり玄米重は0.9ポイント増加している。（表3、表4、図3及び図4）

表4 最近の作柄（平成24年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作最況終指数）
24	—	○	104
25	○	—	104
26	◎	×	104
27	○	×	101
28	—	○	102
29	○	×	100
30	○	—	101

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）

なお、平成27年産以降の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（福島は1.85mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

図3 1㎡当たり全もみ数の推移

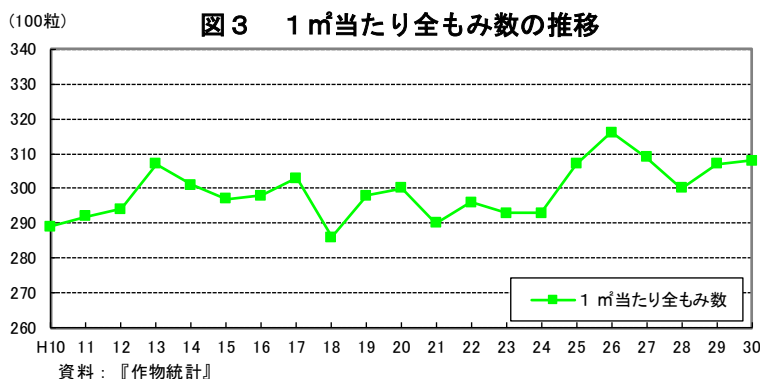


図4 千もみ当たり収量の推移

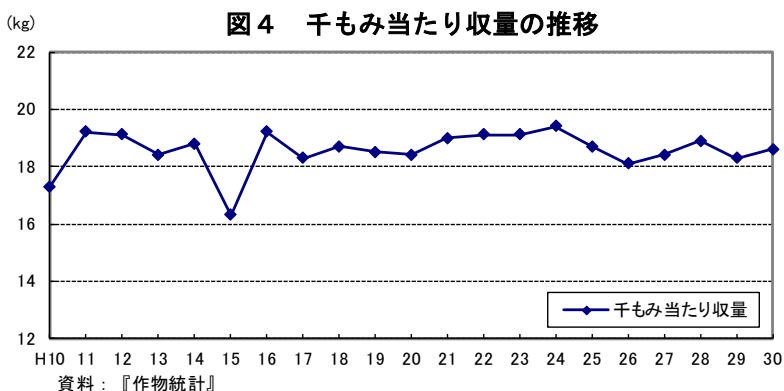


表5 収量構成要素

	21～25年 5中3 ①	平成 26年	27	28	29	30	対前年差	26～30年 5中3 ②	③= ②/①	ポイント差
1㎡当たり株数（株）	17.6	17.4	17.3	17.2	17.1	17.3	0.2	17.3	98.3	△ 1.7
1㎡当たり有効穂数（本）	385	415	420	395	405	396	△ 9.0	405	105.2	5.2
1穂当たりもみ数（粒）	76.6	76.1	73.6	75.9	75.8	77.8	2.0	75.9	99.1	△ 0.9
1㎡当たり全もみ数（百粒）	294	316	309	300	307	308	1.0	308	104.8	4.8
千もみ当たり収量（g）	19.1	18.1	18.4	18.9	18.3	18.6	0.3	18.4	96.3	△ 3.7
玄米千粒重（g）	22.0	21.6	22.2	21.7	21.9	21.7	△ 0.2	21.8	99.1	△ 0.9
10a当たり玄米重（kg）	564	571	568	567	561	572	11.0	569	100.9	0.9

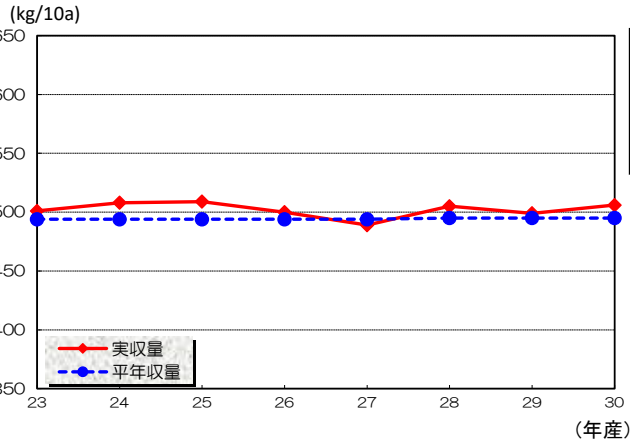
資料：「作物統計」

群馬

1 近年の10 a 当たり収量等の水準

群馬県における近年の10 a 当たり収量については、おおむね平年収量を上回って推移している。（図 1 及び表 1）

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量的水準



注：グラフの目盛りの最低収量を350kgとしている。

群馬	23	24	25	26	27	28	29	30
実収量	501	508	509	500	489	505	499	506
平年収量	494	494	494	494	494	495	495	495
前年差	0	0	0	0	0	1	0	0

資料：『作物統計』

表 1 平年収量と 7 中 5 平均対差等

	30 年 産 平年収量 ①	7 中 5 平 均 ②	平年収量 と の 差 ③=②-①	(参 考)	
				5 中 3 平 均	5 か 年 平 均
群馬	495	504	9	501	500

2 近年の生産事情等

(1) 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、「あさひの夢」及び「コシヒカリ」で約 6 割を占め、収量水準の低い「ゴロピカリ」が減少し、収量水準が高い「ゆめまつり」が増加傾向である。（図 2 及び表 2）

(2) 栽培技術等の動向

高温時の掛け流し及び夜間かん水等の水管理を中心に、品種特性に応じた田植え時期の設定、中間追肥による根の活性、穂肥による稲体の活力維持等高温登熟の回避、高温に強い稲体づくり等の指導がされている。

図 2 品種別作付面積割合の動向

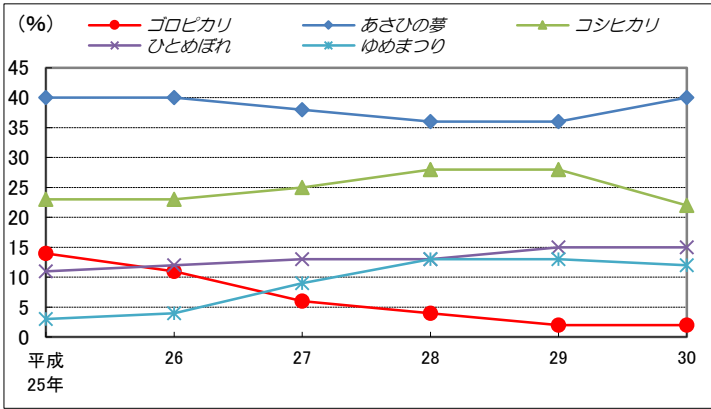


表 2 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a 当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H26	27	28	29	30
あさひの夢	519	40.0	38.0	36.0	36.0	40.0
コシヒカリ	489	23.0	25.0	28.0	28.0	22.0
ゆめまつり	525	4.0	9.0	13.0	13.0	12.0
ひとめぼれ	502	12.0	13.0	13.0	15.0	15.0
ゴロピカリ	491	11.0	6.0	4.0	2.0	2.0

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a 当たり収量水準は原則として、最近 7 年のうち、最高及び最低を除いた 5 年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表3）

表3 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合（％）				
		H26	27	28	29	30
中毛	491	45.1	43.8	44.2	43.5	43.9
北毛	520	11.0	11.9	12.0	11.8	11.5
東毛	511	43.9	44.3	43.8	44.7	44.6

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(3) 近年の作柄

近年、全もみ数が多い状況となっている。

収量構成要素については、平成21～25年と26～30年の各5中3平均で比較すると千もみ当たり収量は減少したものの、1㎡当たり全もみ数が4.9ポイント増加している。（表4、表5、図3及び図4）

表4 最近の作柄（平成24年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作最況終指数）
24	○	○	103
25	○	○	103
26	○	×	101
27	○	※	98
28	○	×	102
29	○	×	101
30	○	×	102

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
一：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）

なお、平成27年産以降の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（群馬は1.80mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

図3 1㎡当たり全もみ数の推移

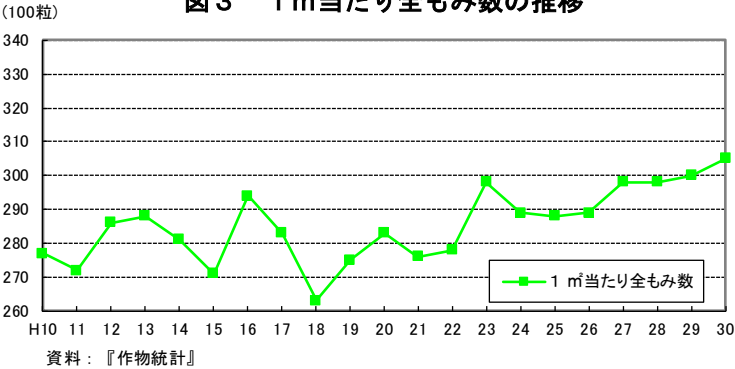


図4 千もみ当たり収量の推移

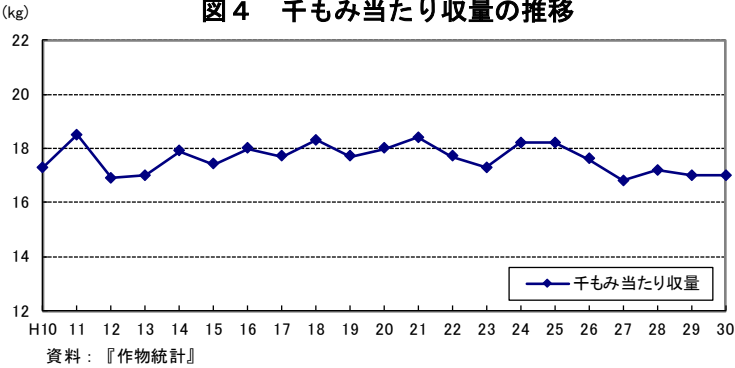


表5 収量構成要素

	21～25年 5中3 ①	平成 26年	27	28	29	30	対前年差	26～30年 5中3 ②	③＝ ②／①	ポイント 差
1㎡当たり株数（株）	18.2	17.5	16.9	17.0	17.0	16.5	△ 0.5	17.0	93.4	△ 6.6
1㎡当たり有効穂数（本）	360	367	372	362	366	379	13.0	368	102.2	2.2
1穂当たりもみ数（粒）	79.7	78.7	80.1	82.3	82.0	80.5	△ 1.5	80.9	101.5	1.5
1㎡当たり全もみ数（百粒）	285	289	298	298	300	305	5.0	299	104.9	4.9
千もみ当たり収量（g）	18.0	17.6	16.8	17.2	17.0	17.0	0.0	17.1	95.0	△ 5.0
玄米千粒重（g）	21.3	21.7	21.8	21.6	21.7	21.2	△ 0.5	21.7	101.9	1.9
10a当たり玄米重（kg）	516	510	501	514	511	518	7.0	512	99.2	△ 0.8

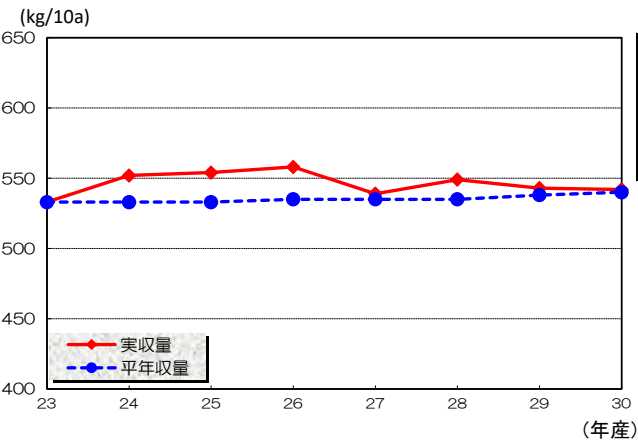
資料：「作物統計」

千葉

1 近年の10 a 当たり収量等の水準

千葉県における近年の10 a 当たり収量については、平年収量を上回って推移している。
(図1及び表1)

図1 近年の10 a 当たり収量と平年収量的水準



千葉	23	24	25	26	27	28	29	30
実収量	533	552	554	558	539	549	543	542
平年収量	533	533	533	535	535	535	538	540
前年差	0	0	0	2	0	0	3	2

資料：『作物統計』

2 近年の生産事情等

(1) 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、「コシヒカリ」が6割を占め、収量水準の高い「ふさこがね」及び「ふさおとめ」が増加傾向にある。(図2及び表2)

(2) 栽培技術等の動向

耐病性、耐倒伏性、品質向上のため、ケイ酸が不足しているほ場へのケイ酸補給、中干し、適正な時期の適量の穂肥の施肥によるもみ数確保等の徹底等の指導がされている。

表1 平年収量と7中5平均対差等

	30年産 平年収量 ①	7中5 平均 ②	平年収量 との差 ③=②-①	(参考)	
				5中3 平均	5か年 平均
千葉	540	548	8	545	546

図2 品種別作付面積割合の動向

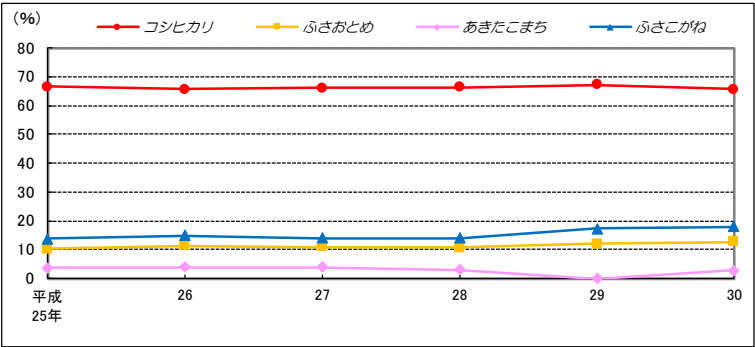


表2 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H26	27	28	29	30
コシヒカリ	532	65.8	66.1	66.4	67.3	65.8
ふさこがね	602	15.0	14.0	14.0	17.3	18.1
ふさおとめ	570	11.4	11.0	10.8	12.1	12.8
あきたこまち	566	4.0	4.0	3.0	2.8	2.9

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均であ
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表3）

表3 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合（％）				
		H26	27	28	29	30
京 葉	528	27.2	27.4	27.4	27.4	27.2
九十九里	566	51.9	51.6	51.9	52.0	52.1
南 房 総	529	20.9	21.0	20.7	20.6	20.7

資料：水稲作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(3) 近年の作柄

近年、全もみ数が多い状況となっている。

収量構成要素については、平成21～25年と26～30年の各5中3平均で比較すると千もみ当たり収量は減少したものの、1㎡当たり全もみ数が3.7ポイント増加したため、10a当たり玄米重は0.7ポイント増加している。（表4、表5、図3及び図4）

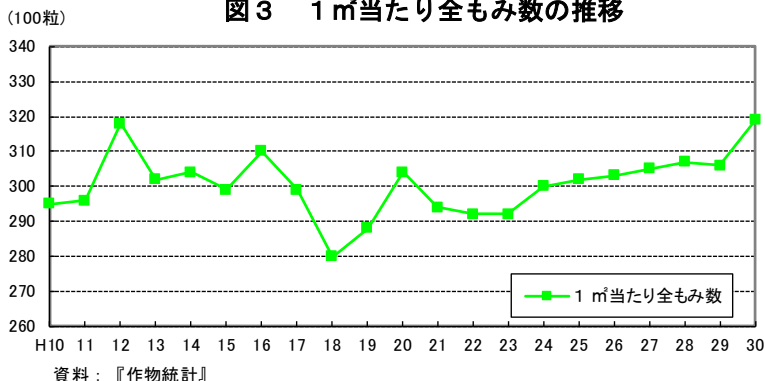
表4 最近の作柄（平成24年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作最況最終指数）
24	○	—	104
25	○	—	104
26	○	—	104
27	○	×	101
28	○	—	102
29	○	×	100
30	○	※	99

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）

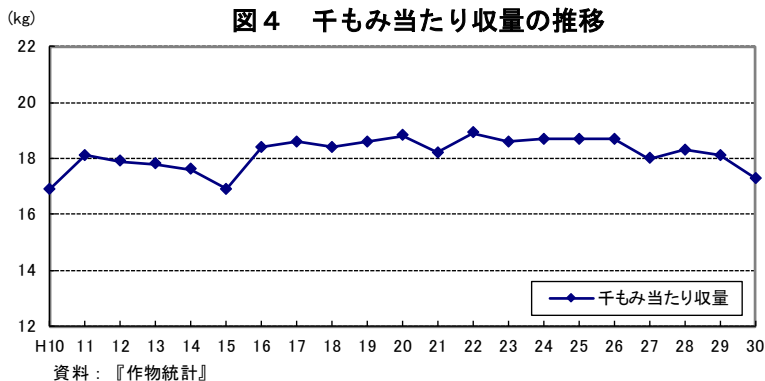
なお、平成27年産以降の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（千葉は1.80mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

図3 1㎡当たり全もみ数の推移



資料：『作物統計』

図4 千もみ当たり収量の推移



資料：『作物統計』

表5 収量構成要素

	21～25年 5中3 ①	平成 26年	27	28	29	30	対前年差	26～30年 5中3 ②	③＝ ②／①	ポイント 差
1㎡当たり株数（株）	16.6	16.3	16.1	16.1	16.0	16.0	0.0	16.1	97.0	△ 3.0
1㎡当たり有効穂数（本）	375	386	386	372	394	398	4.0	389	103.7	3.7
1穂当たりもみ数（粒）	78.2	78.5	79.0	82.5	77.7	80.2	2.5	79.2	101.3	1.3
1㎡当たり全もみ数（百粒）	295	303	305	307	306	319	13.0	306	103.7	3.7
千もみ当たり収量（g）	18.7	18.7	18.0	18.3	18.1	17.3	△ 0.8	18.1	96.8	△ 3.2
玄米千粒重（g）	21.3	21.5	20.7	22.0	21.7	21.1	△ 0.6	21.4	100.5	0.5
10a当たり玄米重（kg）	552	568	549	562	553	552	△ 1.0	556	100.7	0.7

資料：「作物統計」

新潟

1 近年の10 a 当たり収量等の水準

新潟県における近年の10 a 当たり収量については、天候不順だった27年、29年及び30年を除き、平年収量を上回っている。（図1 及び表1）

図1 近年の10 a 当たり収量と平年収量的水準

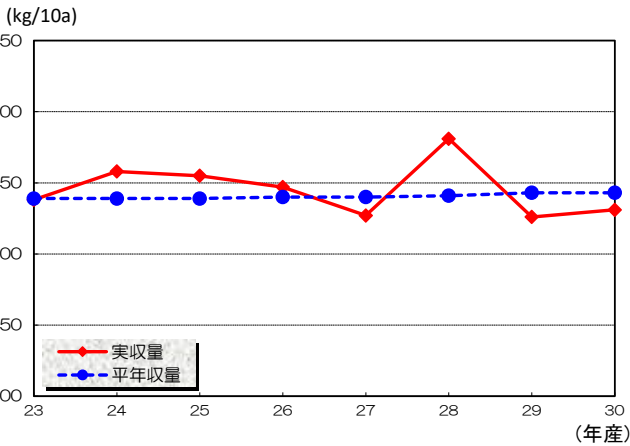


表1 平年収量と7中5平均対差等

	30 年 産 平年収量 ①	7 中 5 平 均 ②	平年収量 と の 差 ③＝②－①	(参 考)	
				5 中 3 平 均	5 か 年 平 均
				535	542
新 潟	543	544	1		

新 潟	23	24	25	26	27	28	29	30
実収量	538	558	555	547	527	581	526	531
平年収量	539	539	539	540	540	541	543	543
前年差	0	0	0	1	0	1	2	0

資料：『作物統計』

2 近年の生産事情等

(1) 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、「コシヒカリ」が約7割を占め、収量水準の高い「ゆきん子舞」が増加傾向にある。（図2 及び表2）

(2) 栽培技術等の動向

作業時期を分散させるために早生品種及び晩生品種の導入が進んでいることから、品種に応じた登熟確保が可能な時期の田植え、早生品種の健苗育生と適期田植えによる初期分けつの確保、晩生品種の特性に応じた栽植密度の移植等の指導がされている。

図2 品種別作付面積割合の動向

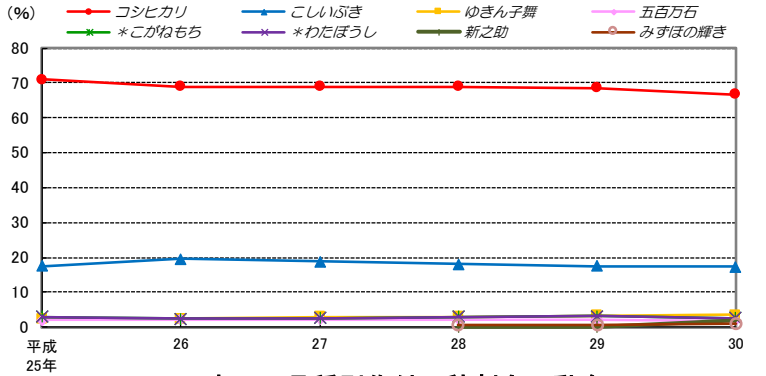


表2 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H26	27	28	29	30
コシヒカリ	546	69.0	69.0	69.0	68.5	66.8
こしいぶき	600	19.5	18.8	18.0	17.6	17.4
ゆきん子舞	674	2.5	3.0	3.0	3.3	3.6
*こがねもち	546	2.5	2.7	3.0	3.2	2.7
*わたぼうし	576	2.0	2.0	2.6	2.8	2.6
五百万石	603	2.2	2.3	2.3	2.3	1.9
新之助	566	—	—	0.1	0.1	1.9
みずほの輝き	635	—	—	0.5	0.7	1.0

資料：水稲作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均であ
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表3）

表3 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合（％）				
		H26	27	28	29	30
岩船	560	5.4	5.3	5.3	5.4	5.4
下越北	566	14.6	14.5	14.3	14.4	14.4
下越南	589	28.6	28.7	29.0	29.1	28.9
中越	546	21.3	21.5	21.4	21.2	21.1
魚沼	531	12.7	12.9	12.9	12.9	12.9
上越	535	12.3	12.1	12.1	12.1	12.5
佐渡	537	5.1	5.0	5.0	4.9	4.8

資料：水稲作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(3) 近年の作柄

近年、全もみ数は29年、30年を除きおおむね多く、登熟は26年、27年を除きおおむね年並み以上となっている。

収量構成要素については、平成21～25年と26～30年の各5中3平均で比較すると千もみ当たり収量は減少したものの、1㎡当たり全もみ数が1.4ポイント増加している。

（表4、表5、図3及び図4）

表4 最近の作柄（平成24年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作最況終指数）
24	○	—	104
25	○	—	103
26	○	×	101
27	—	×	97
28	○	○	108
29	×	○	96
30	×	—	95

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）

なお、平成27年産以降の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（新潟は1.85mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

図3 1㎡当たり全もみ数の推移

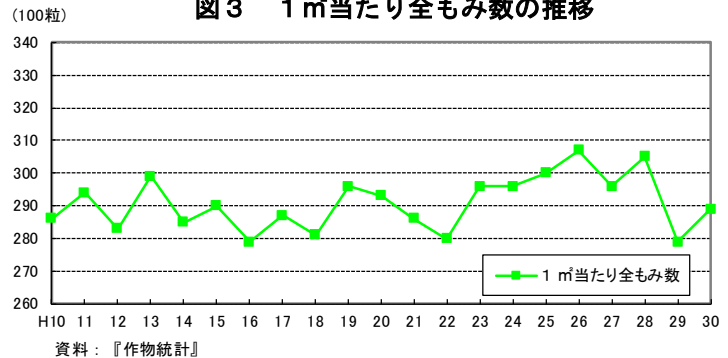


図4 千もみ当たり収量の推移

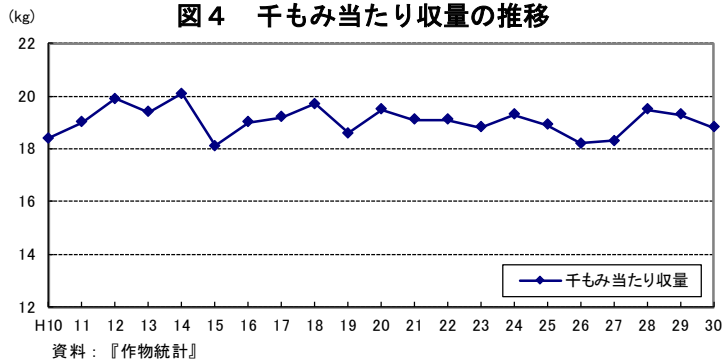


表5 収量構成要素

	21～25年 5中3 ①	平成 26年	27	28	29	30	対前年差	26～30年 5中3 ②	③= ②/①	ポイント 差
1㎡当たり株数(株)	16.8	16.9	16.8	16.8	16.7	16.9	0.2	16.8	100.0	0.0
1㎡当たり有効穂数(本)	357	388	398	389	374	358	△ 16.0	384	107.6	7.6
1穂当たりもみ数(粒)	81.8	79.1	74.4	78.4	74.6	80.7	6.1	77.4	94.6	△ 5.4
1㎡当たり全もみ数(百粒)	293	307	296	305	279	289	10.0	297	101.4	1.4
千もみ当たり収量(g)	19.0	18.2	18.3	19.5	19.3	18.8	△ 0.5	18.8	98.9	△ 1.1
玄米千粒重(g)	21.5	21.5	21.7	21.5	22.1	21.5	△ 0.6	21.6	100.5	0.5
10a当たり玄米重(kg)	556	559	542	596	539	542	3.0	548	98.6	△ 1.4

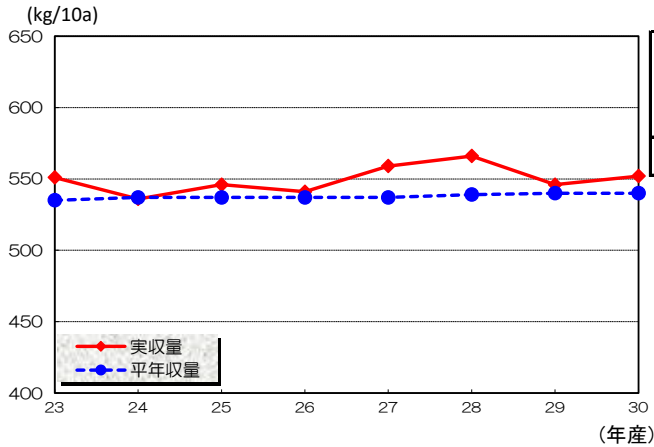
資料：「作物統計」

富 山

1 近年の10 a 当たり収量等の水準

富山県における近年の10 a 当たり収量については、平年収量を上回って推移している。
(図 1 及び表 1)

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量的水準



富 山	23	24	25	26	27	28	29	30
実収量	551	536	546	541	559	566	546	552
平年収量	535	537	537	537	537	539	540	540
前年差	0	2	0	0	0	2	1	0

資料：『作物統計』

表 1 平年収量と7中5平均対差等

	30 年 産 平年収量 ①	7 中 5 平 均 ②	平年収量 と の 差 ③=②-①	(参 考)	
				5 中 3 平 均	5 か 年 平 均
富 山	540	549	9	552	553

2 近年の生産事情等

(1) 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、主力品種の「コシヒカリ」が約7割を占めている。「コシヒカリ」偏重の是正から、収量水準の高い晩生種の「てんこもり」が増加傾向にある。(図 2 及び表 2)

(2) 栽培技術等の動向

初期の茎数確保の観点から、平成25年から栽植密度70株/3.3㎡の確保、適期中干しによる根の健全化と過剰なもみ数の防止、出穂後20日間のかん水管理による稲体活力の維持、生育、気象状況に応じた穂肥施用(穂揃い期の葉色を4.2~4.5に誘導)等の指導がされている。

図 2 品種別作付面積割合の動向

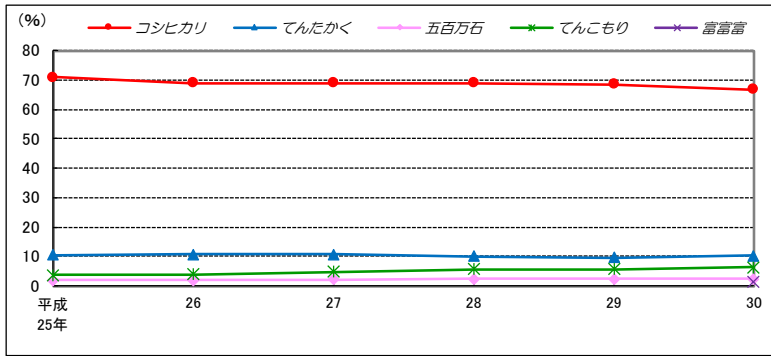


表 2 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H26	27	28	29	30
コシヒカリ	544	78.3	76.7	75.3	74.3	72.1
てんたかく	586	10.7	10.7	10.0	9.7	10.4
てんこもり	608	4.0	4.8	5.6	5.7	6.4
五百万石	544	2.0	2.2	2.3	2.3	2.4
富富富	544	-	-	-	-	1.3

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。

2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(3) 近年の作柄

近年、全もみ数はおおむね多く、登熟もおおむね平年並みの状況となっている。

収量構成要素については、平成21～25年と26～30年の各5中3平均で比較すると千もみ当たり収量は減少したものの、1㎡当たり全もみ数が2.8ポイント増加したため、10a当たり玄米重は1.6ポイント増加している。（表3、表4、図3及び図4）

表3 最近の作柄（平成24年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作最況終指）数
24	×	○	100
25	—	○	102
26	○	×	101
27	○	—	103
28	◎	—	106
29	○	—	100
30	○	—	102

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）

なお、平成27年産以降の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（富山は1.85mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

図3 1㎡当たり全もみ数の推移

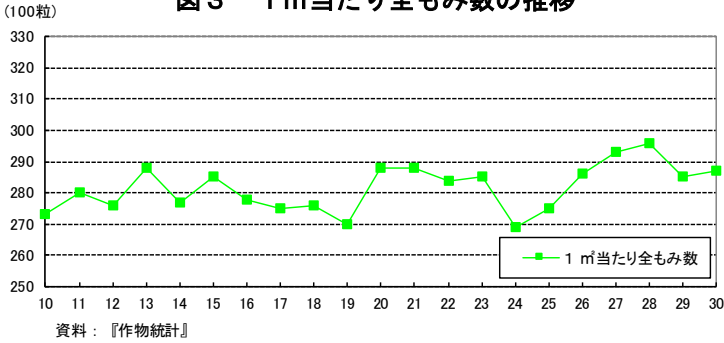


図4 千もみ当たり収量の推移

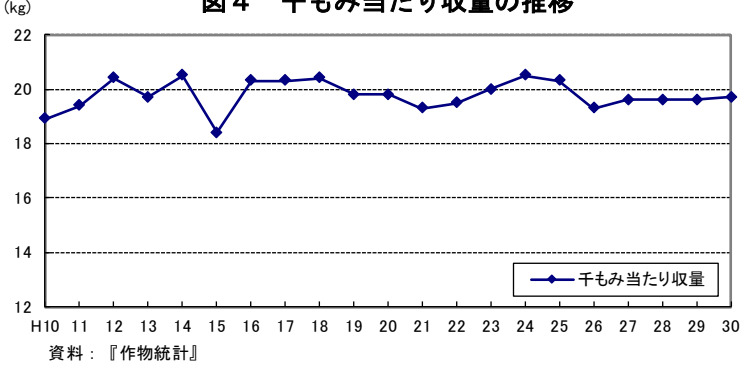


表4 収量構成要素

	21～25年 5中3 ①	平成 26年	27	28	29	30	対前年差	26～30年 5中3 ②	③= ②／①	ポイン ト差
1㎡当たり株数(株)	18.7	18.7	19.1	19.2	19.1	19.2	0.1	19.1	102.1	2.1
1㎡当たり有効穂数(本)	356	365	386	384	384	371	△ 13.0	380	106.7	6.7
1穂当たりもみ数(粒)	78.4	78.4	75.9	77.1	74.2	77.4	3.2	76.8	98.0	△ 2.0
1㎡当たり全もみ数(百粒)	281	286	293	296	285	287	2.0	289	102.8	2.8
千もみ当たり収量(g)	19.9	19.3	19.6	19.6	19.6	19.7	0.1	19.6	98.5	△ 1.5
玄米千粒重(g)	22.2	21.9	21.8	22.2	22.5	22.0	△ 0.5	22.0	99.1	△ 0.9
10a当たり玄米重(kg)	557	553	573	579	560	565	5.0	566	101.6	1.6

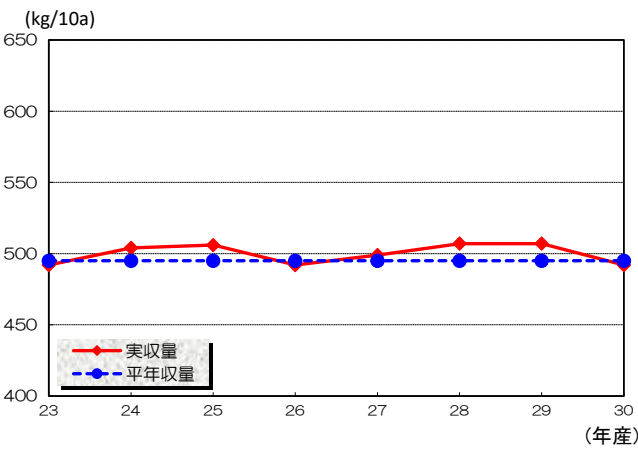
資料：「作物統計」

和歌山

1 近年の10 a 当たり収量等の水準

和歌山県における近年の10 a 当たり収量については、おおむね平年収量を上回って推移している。（図 1 及び表 1）

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量的水準



和歌山	23	24	25	26	27	28	29	30
実収量	492	504	506	492	499	507	507	492
平年収量	495	495	495	495	495	495	495	495
前年差	0	0	0	0	0	0	0	0

資料：『作物統計』

表 1 平年収量と 7 中 5 平均対差等

	30 年 産 平年収量 ①	7 中 5 平 均 ②	平年収量 と の 差 ③＝②－①	単位：kg (参 考)	
				5 中 3 平 均	5 か 年 平 均
				499	499
和歌山	495	502	7		

2 近年の生産事情等

(1) 品種構成の動向

種構成の動向をみると、「キヌヒカリ」、「コシヒカリ」、「ヒノヒカリ」で約 6 割を占めている。近年、「イクヒカリ」及び収量水準が低い「日本晴」が減少傾向であり、収量水準が高い「きぬむすめ」が増加傾向にある。（図 2 及び表 2）

(2) 栽培技術等の動向

キヌヒカリの品質向上に向け、関係機関の移植時期、栽植密度、水管理、施肥方法の試験・研究の成果に基づく普及・指導、登熟期の高温回避のための遅植え指導がされている。

図 2 品種別作付面積割合の動向

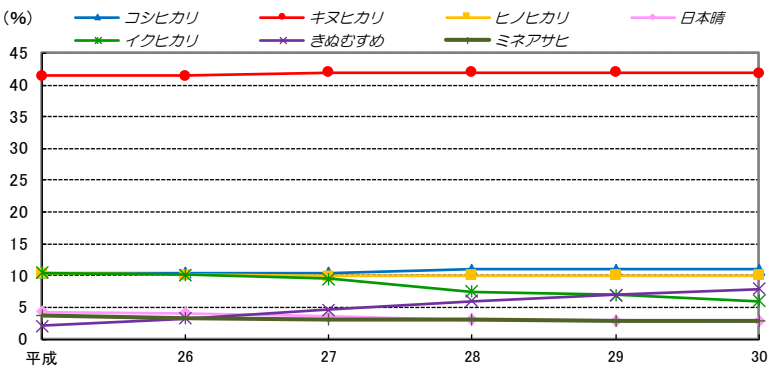


表 2 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a 当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H26	27	28	29	30
キヌヒカリ	517	41.4	42.0	42.0	42.0	41.9
コシヒカリ	446	10.4	10.5	11.0	11.0	11.0
ヒノヒカリ	521	10.1	9.9	10.0	10.0	10.0
きぬむすめ	549	3.3	4.6	6.0	7.0	7.9
イクヒカリ	520	10.1	9.5	7.5	7.0	6.0
日本晴	493	4.1	3.6	3.0	2.9	2.8
ミネアサヒ	505	3.4	3.2	3.0	2.9	2.8
ヤマヒカリ	389	1.6	1.5	1.2	1.1	1.1

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a 当たり収量水準は原則として、最近 7 か年のうち、最高及び最低を除いた 5 か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(3) 近年の作柄

近年、全もみ数はおおむね多い状況となっている。

収量構成要素については、平成21～25年と26～30年の各5中3平均で比較すると千もみ当たり収量は減少したものの、1㎡当たり全もみ数が2.1ポイント増加したため、10a当たり玄米重は0.4ポイント増加している。（表3、表4、図3及び図4）

表3 最近の作柄（平成24年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作況最終指数）
24	—	○	102
25	○	×	102
26	○	×	99
27	—	—	101
28	○	—	102
29	○	—	102
30	—	×	99

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）

なお、平成27年産以降の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（和歌山は1.80mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

図3 1㎡当たり全もみ数の推移

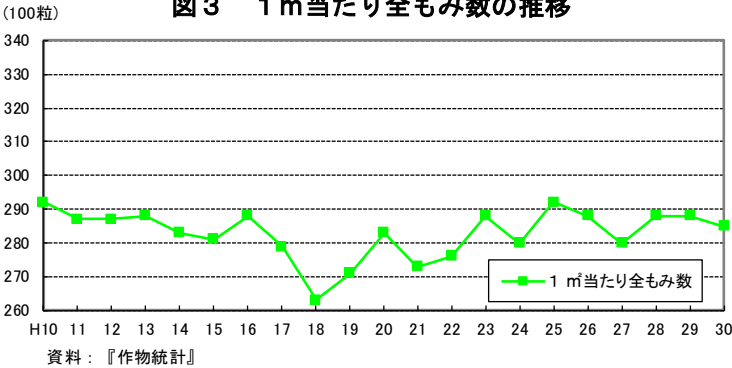


図4 千もみ当たり収量の推移

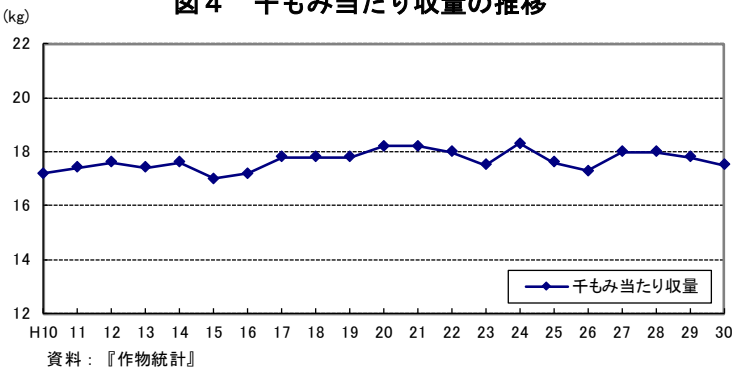


表4 収量構成要素

	21～25年 5中3 ①	平成 26年	27	28	29	30	対前年差	26～30年 5中3 ②	③= ②／①	ポイン ト差
1㎡当たり株数(株)	17.1	16.4	16.4	16.2	16.0	16.0	0.0	16.2	94.7	△5.3
1㎡当たり有効穂数(本)	364	370	356	363	378	361	△17.0	365	100.3	0.3
1穂当たりもみ数(粒)	77.7	77.8	78.7	79.3	76.2	78.9	2.7	78.5	101.0	1.0
1㎡当たり全もみ数(百粒)	281	288	280	288	288	285	△3.0	287	102.1	2.1
千もみ当たり収量(g)	17.9	17.3	18.0	18.0	17.8	17.5	△0.3	17.8	99.4	△0.6
玄米千粒重(g)	21.9	21.8	22.0	21.9	21.9	22.1	0.2	21.9	100.0	0.0
10a当たり玄米重(kg)	504	498	505	518	513	500	△13.0	506	100.4	0.4

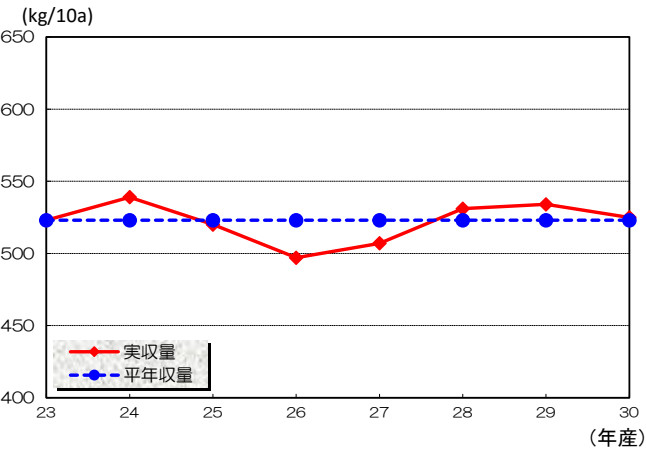
資料：「作物統計」

広島

1 近年の10 a 当たり収量等の水準

広島県における近年の10 a 当たり収量については、28年以降平年収量を上回って推移している。（図1及び表1）

図1 近年の10 a 当たり収量と平年収量的水準



広島	23	24	25	26	27	28	29	30
実収量	523	539	520	497	507	531	534	525
平年収量	523	523	523	523	523	523	523	523
前年差	0	0	0	0	0	0	0	0

資料：『作物統計』

表1 平年収量と7中5平均対差等

	30年産 平年収量 ①	7中5 平均 ②	平年収量 との差 ③=②-①	(参考)	
				5中3 平均	5か年 平均
広島	523	523	0	521	519

2 近年の生産事情等

(1) 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、「コシヒカリ」及び「ヒノヒカリ」で6割を占めている。近年、「ヒノヒカリ」が減少傾向にあり、収量水準の高い「あきさかり」が増加傾向にある。（図2及び表2）

(2) 栽培技術等の動向

広島県が作成した栽培基準に沿って、肥培管理、水管理などの基本管理技術の高位平準化の指導が行われている。

図2 品種別作付面積割合の動向

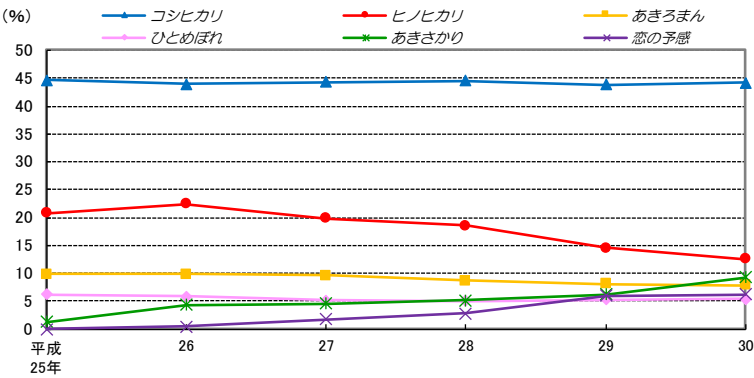


表2 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H26	27	28	29	30
コシヒカリ	518	43.9	44.3	44.5	43.8	44.2
あきさかり	592	4.3	4.6	5.1	6.2	9.3
ヒノヒカリ	522	22.4	19.9	18.5	14.5	12.5
あきろまん	549	9.8	9.6	8.7	8.1	7.9
恋の予感	518	0.4	1.7	2.8	6.0	6.2
ひとめぼれ	512	5.9	5.2	5.0	5.3	5.4
こいもみじ	558	1.6	1.8	1.7	1.3	1.1

資料：水稲作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

地域別別作付面積割合をみると、南部地帯が減少し、北部地帯が増加傾向となっている。（表3）

表3 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	（参考） 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合（％）				
		H26	27	28	29	30
南部	524	41.8	41.5	41.2	40.7	40.5
北部	523	58.2	58.5	58.8	59.3	59.5

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。

2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(3) 近年の作柄

平成28年以降登熟が良い状況となっている。

収量構成要素については、平成21～25年と26～30年の各5中3平均で比較すると1㎡当たり全もみ数が減少したものの、千もみ当たり収量が1.6ポイント増加した。

（表4、表5、図3及び図4）

表4 最近の作柄（平成24年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作最況終指数）
24	—	○	103
25	○	×	99
26	—	×	95
27	×	—	96
28	—	○	102
29	—	○	102
30	×	○	101

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）

なお、平成27年産以降の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（広島は1.80mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

図3 1㎡当たり全もみ数の推移

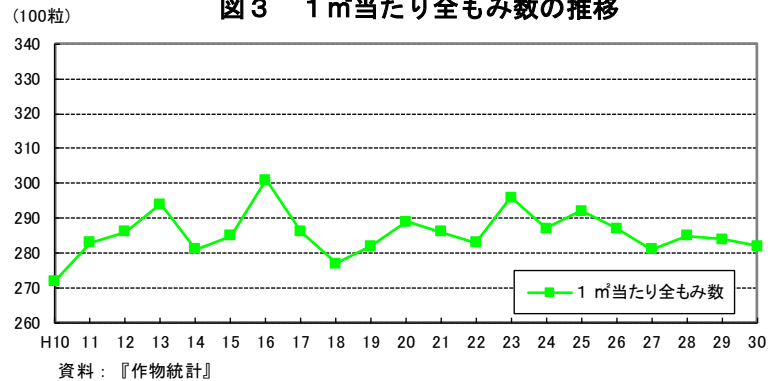


図4 千もみ当たり収量の推移

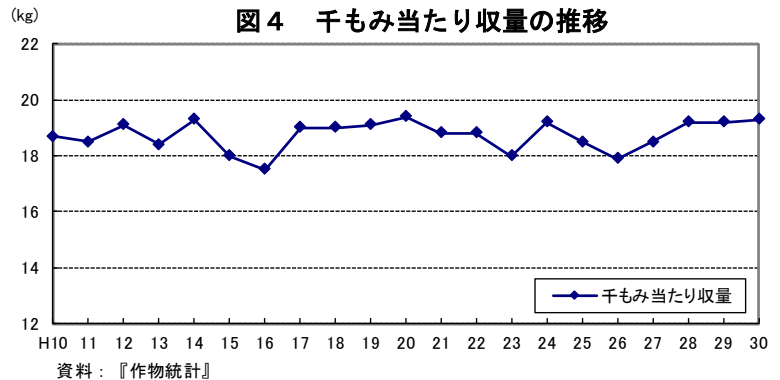


表5 収量構成要素

	21～25年 5中3 ①	平成 26年	27	28	29	30	対前年差	26～30年 5中3 ②	③= ②／①	ポイント 差
1㎡当たり株数（株）	16.3	16.0	15.7	16.0	15.9	15.5	△ 0.4	15.9	97.5	△ 2.5
1㎡当たり有効穂数（本）	361	379	372	342	381	353	△ 28.0	368	101.9	1.9
1穂当たりもみ数（粒）	80.8	75.7	75.5	83.3	74.5	79.9	5.4	77.0	95.3	△ 4.7
1㎡当たり全もみ数（百粒）	288	287	281	285	284	282	△ 2.0	284	98.6	△ 1.4
千もみ当たり収量（g）	18.7	17.9	18.5	19.2	19.2	19.3	0.1	19.0	101.6	1.6
玄米千粒重（g）	21.8	22.0	21.8	21.9	22.5	22.0	△ 0.5	22.0	100.9	0.9
10a当たり玄米重（kg）	537	514	521	547	546	545	△ 1.0	537	100.0	0.0

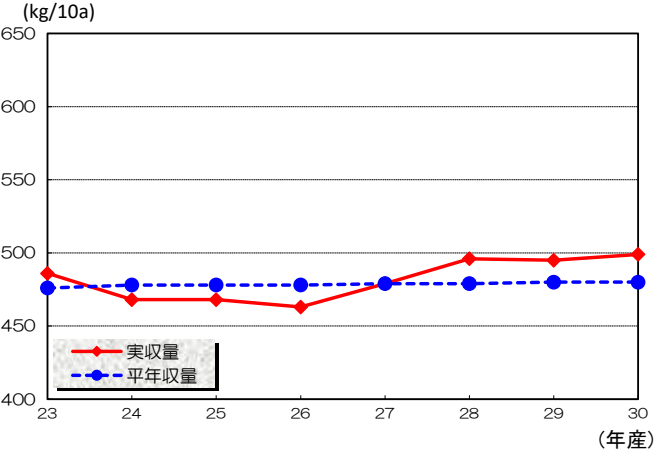
資料：「作物統計」

長 崎

1 近年の10 a 当たり収量等の水準

長崎県における近年の10 a 当たり収量については、28年以降平年収量を上回って推移している。（図1 及び表1）

図1 近年の10 a 当たり収量と平年収量的水準



長 崎	23	24	25	26	27	28	29	30
実収量	486	468	468	463	479	496	495	499
平年収量	476	478	478	478	479	479	480	480
前年差	0	2	0	0	1	0	1	0

資料：『作物統計』

2 近年の生産事情等

(1) 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、「ヒノヒカリ」及び「にこまる」で約8割を占めている。近年、「ヒノヒカリ」への集中をさけるため「ヒノヒカリ」が減少傾向にあり、収量水準の高い「にこまる」及び「なつほのか」が増加傾向にある。（図2 及び表2）

(2) 栽培技術等の動向

品質に加え食味に重点をおいた栽培技術が各地で実証されつつあり、今後は各地域に導入している成分分析計の数値結果を基に、改善技術の普及・徹底を図る。穂肥については、水稻の生育状況に応じた分肥体系による施肥の推進をしている。

表1 平年収量と7中5平均対差等

	30 年 産 平年収量 ①	7 中 5 平 均 ②	平年収量 と の 差 ③＝②－①	単位：kg (参 考)	
				5 中 3 平 均	5 か 年 平 均
長 崎	480	481	1	490	486

図2 品種別作付面積割合の動向

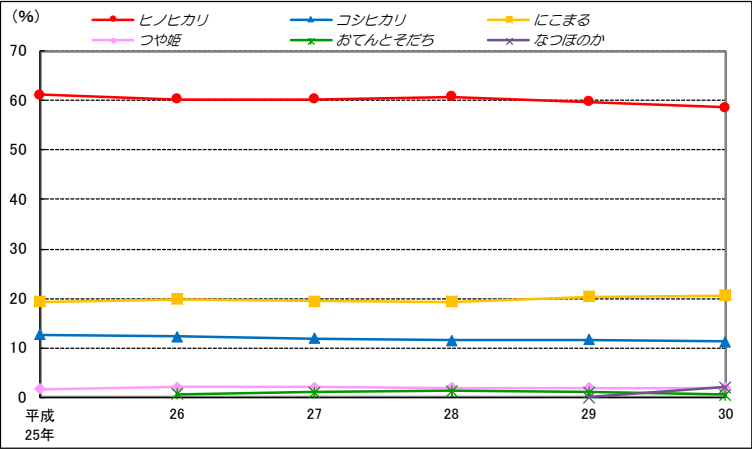


表2 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H26	27	28	29	30
ヒノヒカリ	486	60.2	60.2	60.7	59.7	58.6
コシヒカリ	456	12.3	11.9	11.5	11.6	11.3
にこまる	536	19.8	19.5	19.3	20.3	20.6
つや姫	559	2.1	2.1	1.9	2.0	2.0
おてんとそだち	561	0.6	1.1	1.3	1.1	0.5
なつほのか	563	-	-	-	0.0	2.1

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

作柄地帯別作付面積割合をみると、
 壱岐・対馬及び収量水準の低い五
 島地帯の作付面積割合が減少傾向に
 あり、収量水準の高い南部地帯の作
 付面積割合が増加傾向にある。
 (表3)

表3 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H26	27	28	29	30
南部	506	51.9	53.0	54.2	54.5	54.8
北部	449	32.0	31.4	31.1	31.1	31.2
五島	416	4.9	4.5	4.0	3.7	3.6
壱岐・対馬	494	11.2	11.1	10.7	10.7	10.4

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。

2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(3) 近年の作柄

平成28年以降登熟が悪いものの、全もみ数が多い状況となっている。

収量構成要素については、平成21～25年と26～30年の各5中3平均で比較すると千もみ当たり収量は少なかったものの、1㎡当たり全もみ数が4.7ポイント増加したため、10a当たり玄米重は2.4ポイント増加している。(表4、表5、図3及び図4)

表4 最近の作柄（平成24年産以降）

年次	全もみ数	登熟	(作最況終指数)
24	—	×	98
25	—	×	98
26	×	—	97
27	—	—	100
28	◎	×	104
29	○	×	101
30	◎	×	104

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
 —：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
 ※：不良（少ない）

なお、平成27年産以降の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（長崎は1.80mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

図3 1㎡当たり全もみ数の推移

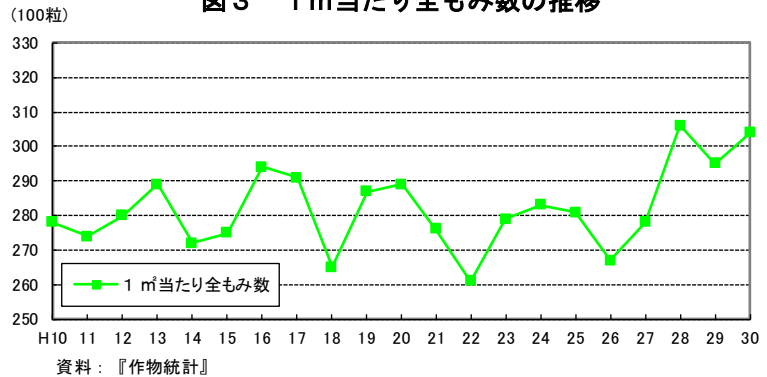


図4 千もみ当たり収量の推移

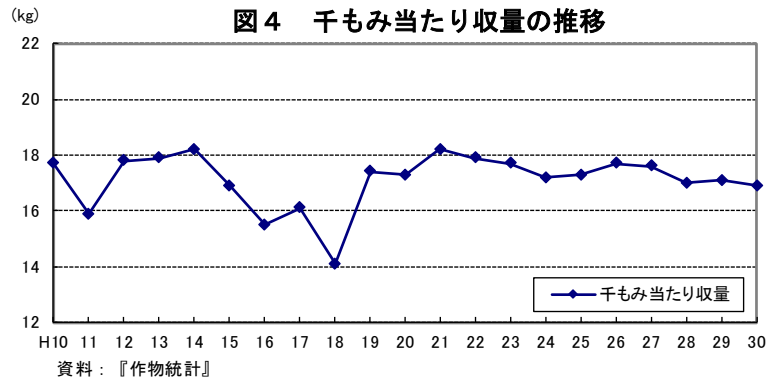


表5 収量構成要素

	21～25年 5中3 ①	平成 26年	27	28	29	30	対前年差	26～30年 5中3 ②	③= ②/①	ポイント 差
1㎡当たり株数(株)	17.7	16.6	16.4	16.6	16.4	16.0	△0.4	16.5	93.2	△6.8
1㎡当たり有効穂数(本)	367	359	353	394	399	402	3.0	384	104.6	4.6
1穂当たりもみ数(粒)	74.9	74.4	78.8	77.7	73.9	75.6	1.7	75.9	101.3	1.3
1㎡当たり全もみ数(百粒)	279	267	278	306	295	304	9.0	292	104.7	4.7
千もみ当たり収量(g)	17.6	17.7	17.6	17.0	17.1	16.9	△0.2	17.2	97.7	△2.3
玄米千粒重(g)	21.4	21.1	21.6	21.3	20.8	21.4	0.6	21.3	99.5	△0.5
10a当たり玄米重(kg)	490	473	488	519	504	515	11.0	502	102.4	2.4

資料：「作物統計」